

3

March 2021
Vol.37 NO.12

心をはぐくむ.....

道徳と 特別活動

Moral Education & Special Activities

道徳と特別活動 3月号
令和3年2月16日発行(毎月1回15日発行)

特集●児童の学びや成長を次年度につなげる工夫

—児童の評価と記録—

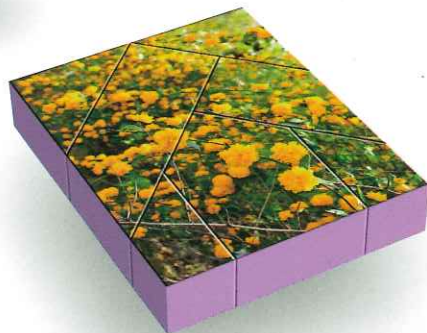
- 論考「一年間の積み重ねをどう次年度へつなげるか—道徳と特別活動を中心に—」馬場喜久雄
「学校の『重点目標』の実現と諸計画の改善—学びの成果を次年度につなげる—」橋本ひろみ
「道徳科の評価を次年度にどう引き継ぐか—妥当性や信頼性を高める学習評価のために—」大原龍一
「『キャリア・パスポート』を活用した年度末の振り返りと引き継ぎ」橋谷由紀
「特別活動の評価を次年度にどう引き継ぐか
—評価を生かした指導の充実に向けて—」和久井伸彦
- 実践 長森由莉／山本由紀子／山崎邦彦／源 憲一



連載

- 子供のよさを生かす道徳教育—浅見哲也
- 自発的、自立的な活動を充実するための指導のサイクル—安部恭子
- 道徳授業マネジメント—赤堀博行
- 「キャリア・パスポート」に生かす日々の学びの整理術—稲垣孝章
- 明日からの学校・学級生活に生きる学校危機管理術—渡邊正樹

実践赤ベンチェック／プロの「キャリアの分岐点」を教えてください！
教科等に関連付けた体験活動プログラム／世界のTOKKATSU便り



モノサシは無数

花まる学習会代表 高濱正伸

あなたは、障がいのある人を、どう思っていますか？ 家族が車椅子を使っている、ということでもない限り、大抵は「かわいそう」「援助しなければ」「差別してはいけない」といった言葉が出てくるのではないのでしょうか。それらは「普通の人たちより劣っている」という前提で語られていますね。本当にそうでしょうか。

「劣っている」という見方は、何かのモノサシ（基準）を使って捉えているということです。そしてそれは、主に数値で表せるものに使われることが多いという特徴があります。「テストの点数が低い人は、百点の人に比べて」「給料の低い人は、高い人に比べて」「偏差値の低い学校は、高い学校に比べて」劣っている、というようにです。

そういう気持ちになること自体は、人間ならば仕方ないでしょう。あるモノサシをもち出して大勢の人の力を測ると、正規分布という曲線のグラフに

なります。平均点の人たちが一番多くて、左右の端に行くほど低くなる、なだらかな山のような曲線です。つまり、「みんなで測れば必ず差がつく」ということですし、そこには必ず喜びや悔しさが生まれるものです。

私がここで話したいのは、モノサシは無数に考えられるのだから、「一つのモノサシに縛られて」「ダメ」「かわいそう」「価値がない」などと考える必要はないということです。

みなさんの中に、「どうせ」が口癖になっている人はいないでしょうか。「どうせ私は算数が苦手だ」「どうせあの人には勝てない……」それらは全て、「一つのモノサシに心がとらわれている人の言葉です。人間は心をもつ生き物で、事実だけではなく心で世界を捉えます。人の心の特徴の一つに「こだわり」があります。何か強い思いをもった瞬間から、その束縛から逃れて考えることができなくなるので

～子どもたちに贈るメッセージ～

今、君たちに伝えたいこと

す。特にコンプレックスという負の感情は強固で、下手をすと思ひ込んだイメージが一生続きます。そのキーワードが「どうせ」です。

たかが一つの基準で自分を蔑むことはやめましょう。教科や足の速さなど、数値や成績が出せることだけでも種類はたくさんある上に、優しい・まじめ・粘り強い・アイデアマン・人の気持ちを感じ取ることが出来る・他人を笑わせられる等々、人の魅力の軸は無数にあるのです。「どうせ」は心のマジックに掛かっているだけ。あなたならではの価値を見て、信じてください。

さて、それでは、歩けないし言葉も話せないような複数の障がいのある人（重複障がいと言います）にも「あなたならではの価値」というものはあるのでしょうか。実は、私の息子は重複障がい者です。正直に告白すると、かわいく、いとoshいのは本当なのですが、誕生以来ずっと「この子に何が出来るだろう。この子が優位に立てるモノサシを探せない」と思っていたのです。

しかし、十年ほど経ったときにふと気付いたので「二人で一つ」という戦いをさせたら、息子は強力だということに。個人戦にこだわるから「なら

ではの価値」が見付からなかったのです。実は私は、大学に落ちること三回、大学在学中でも落第を四回繰り返すような、遊んで生きてきたダメ人間でした。ところが、彼が生まれてからは、人一倍まじめに、ひたすらに働き続けることができたのです。

みなさんは化学の勉強で出てくる「触媒」という言葉を知っていますか。自分は変わらぬのに、ある物質の変化を活発にする存在。息子は私にとって「触媒」なのだと思いました。その特徴は「心を整えてくれる」ことです。一緒にいて温もりを感じられるだけでも十分に幸せだ、ということを経験して感させてくれるので、雑念にとらわれない日々を過ごすことができます。モノサシを個人戦のものから団体戦のものにすれば超強力なのが、私の息子だということなんです。どうでしょうか、この考え方は、「家族」「クラス」などにも応用できるのではないのでしょうか。

「みんなで一つの幸せ」をつくり上げるこの価値を見つめれば、冒頭で示した一つ一つのモノサシが、実は人生のごく一部しか測れていないことに気付くでしょう。モノサシは無数に探せるのです。



プロフィール

東京大学卒、同大学院修士課程修了。学生時代から予備校等で受験生を指導する中、幼児期の環境と体験が、学力の伸び悩み・人間関係の挫折と引きこもり傾向などの諸問題と関係していると確信し、1993年に幼児～小学生を対象とした学習塾「花まる学習会」を設立。「メシが食える大人に育てる」という理念のもと、「作文」「読書」「思考力」「野外体験」を軸に据え、現在も現場に立ち続ける。2020年から無人島プロジェクトを開始。

保護者や子供、教員向けの講演を年間約130回開催し、これまでにのべ20万人以上が参加している。「伸び続ける子が育つお母さんの習慣」「算数脳パズルなぞべ〜」シリーズ、「メシが食える大人になる！よのなかルールブック」など、著書多数。